

初版から5年、車いすや座位保持装置に関する法制度の改正、姿勢保持に関する新たな知見や技術を加えて、内容を大幅に刷新した改訂第2版が上梓された。

人体の機能や構造の不全や欠損に関わる治療は、細胞レベルの研究や臓器移植など、その成果や社会問題としての側面がしばしばメディアに取り上げられる。人体の、とりわけ運動器の機能や構造の不全や欠損に対するもう一方の取り組み、義肢・装具・車いすなどについては、先のロンドンパラリンピックで、さまざまな競技用車いすや義足が、観衆の目を驚かせることはあっても、普段はあまり関心を寄せられないのが実情である。

身体障害者が自由に活動し、参加するためには、姿勢、移動、そしてコミュニケーションの確保、環境設定は不可欠であり、そのなかでも姿勢保持はあらゆる活動の基盤となる。身体の麻痺や変形のため姿勢を自力で保つことが困難な状況を改善するため、「身体各部のポイントを外的に支え、安定した姿勢や自発的な動きを引き出す姿勢を維持しやすくする方法」が姿勢保持の技術である。

本書の特徴は、姿勢保持が困難な方々への支援について、「総合リハビリテーションの視点」をもって書き進められており、執筆者らの所属する日本リハビリテーション工学協会の立ち位置である「工学」を超えて、障害児者や高齢者が人生に向き合おうとする積極的な「姿勢」をも応援するぞ! との熱意が読み取れるところである。また、このような障害者のニーズに応えるためには、多職種のかかわりが

必要となるが、医学、教育、福祉、介護、工学、製作などさまざまな専門領域の読者を想定し、写真・図を多用して視覚的にわかりやすく飽きさせない工夫がされている。

本書は、「姿勢保持の基礎知識」、「小児」、「高齢者」、「姿勢保持装置製作の実際」、「生活支援と姿勢保持」の5章から構成され、巻末に支給制度にかかわる資料が添付されている。「小児」の章では、脳性麻痺、Duchenne 型筋ジストロフィー、二分脊椎を取り上げ、発達・姿勢制御のメカニズムから説き起こし、ADL、遊び、学習、余暇活動場面での姿勢保持に言及している。教育現場での教材として工夫された、姿勢保持装置のネーミングの妙には思わず笑みがこぼれる。「高齢者」の章では、脳血管障害、中心性頸髄損傷、パーキンソン症候群、脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症、関節リウマチを取り上げ、加齢による心身と姿勢の変化について、施設生活の考え方や介護時のリスク管理も含め対応を紹介している。「姿勢保持装置製作の実際」では、測定した身体寸法を記録する情報カードなどの例示がされているが、コピーして実際に使用できるようにとの親切さである。

最後に、本書は装置を使って遊びやスポーツを楽しむ子どもたちの写真、その笑顔に心が和む本でもある。われわれ、リハビリテーションに携わる者は、この笑顔のために、日々地道な努力が続けられるのである。

(B5 頁 256 2012 年 定価 4,935 円 (本体 4,700 円+税 5%)) [ISBN978-4-260-01541-7] 医学書院刊)